あらすじ

ある日突然、異世界に転生してしまったゆかり。
あたらしい世界ではリリアナという
名前で生きていくことになりました！

そこで先生から魔法を習うことに
したんだけど……
何やら彼には秘密があるみたいで……!?

地球のプチ知識と魔法で
いろんな人をお助け！ドキドキワクワクの
『異世界転生』はじまります！

もくじ

第一章　豊穣の娘と村娘 ……P6

第二章　天使と食堂の女主 ……P22

第三章　異端者達と水の貴婦人…P47

第四章　神の手と治療師 ……P104

第五章　伝道師と慧眼の大商人…P155
※慧眼…物事の本質を鋭く見抜く力のこと

あとがき ……P234

第一章　豊穣の娘と村娘

私の名前は、橘ゆかり。公立高校に通う普通の女子高生です。
我が家は母子家庭。お父さんは、私がお母さんのお腹にいるときに交通事故で亡くなった。
お母さんはショックを受けて、流産しかけたそうだ。
だけど、お母さんのまわりには優しい人達がいた。心配してくれた親族や友人、職場の人達。
なにより、お母さんのお腹の中には私がいて、いつも一緒だった。
お母さんは人の優しさに触れ、徐々に生きる気力を取り戻し、私を産んだ。
そして、素敵な名前をつけてくれた。
――ゆかり――
私がお母さんのもとに生まれてきたのも、運命という名の縁。

人と人との縁を大切にしてほしい、と願いを込めてつけられた名前。
ちょっと照れくさそうに話してくれたよね。ありがとう。そして、ごめんなさい。
私、似なくてもいいところが、お父さんに似てしまったのかな。
私は今日、車に轢かれた。
どうか、またお母さんに人の縁が集まりますように。一人じゃないと気づきますように。
薄れゆく意識の中、私はお母さんの幸せをなによりも願った。
それが、橘ゆかりとしての最期の記憶。

◇　◆　◇

私の名前は、リリアナ・ラ・オリヴィリア。
そして、私には過去にもう一つ名前がありました。
――橘ゆかり――
交通事故によりその生を終え、今はリリアナという名前の少女として生きています。
転生――つまり、別の存在に生まれ変わったようです。

橘ゆかりだった頃の記憶を持ったまま。

しかも、ここは地球ではなく異世界。

この世界に生まれたばかりの頃は現実を受け止められず、ただただ泣き喚いていたけれど、泣いても現実は変わらなかった。そうなると、赤ん坊でも自然と腹を括るもの。

それに私が泣き喚いているとき、こちらの世界のお父様やお母様は、オロオロした様子で私を抱きしめてくれた。頭を優しく撫でてくれた。そんなことされたら、ほだされるに決まっている。

いつしか私は転生を、新たなる生の始まりを受け入れるようになった。

だけど、赤ちゃんライフは元・十六歳には辛かったです。こればかりは受け入れがたかった。回想は断固拒否。羞恥プレイ連続の葬り去りたい過去です。

そして、なにより苦労したのは言葉。この世界の言葉は、赤ん坊ながらすでに日本語であれこれ考えていた私には、外国語にしか聞こえませんでした。文字もまた一緒。

そう、地球とは違う言語が使用されていたんです。だから、柔軟な子供の脳をもってしても、なかなか喋れなかった。前世の記憶があったために生じた弊害。

心配したお父様やお母様は、私にいっぱい話しかけてくれました。

そのせいか、知恵熱とはずっとお友達だったよ。言葉の使い方が違うって？　うん、頭を使いすぎて知恵熱が出た、なんて冗談で言ったりするけれど、本来の意味は違う。知恵がつき始めた、乳児の頃の発熱が知恵熱なんだよね。だけど、私の場合は間違いなく頭の使いすぎによる発熱。

とはいえ成長するにつれて、バラバラだった言葉の音と意味がくっついていき、それは知識となっていく。

そうして、七歳でようやく言葉と文字を完璧にマスターしました。

よく頑張ったよ、私。

その頃になって、私はやっと自分の立場が分かるようになりました。

なんと私、貴族、それも伯爵家の娘として生まれたみたいです！

しかし、そのわりにはボロい我が家。その原因は、両親にありました。

今世での私の両親は、二人揃ってかなりのお人好しでした。

あるときは、商売をしたいが元手がないという青年に借用書もなしにお金を貸し、持ち逃げされてしまった。またあるときは、怪しげな商人に良い話があるから出資してみないかと言われ、素直に出資して大損してしまった、などなど。

学習能力ありますか、とツッコミたい。

私の両親は、見た目も性格も良くて、堅実。なのにお人好しな気質がそうさせるのか、少し考えれば分かる嘘もすぐに信じてしまう。おかげで豊かな領地を持ちながら、我が家の家計は常に火の車。

けれど、私はそんなお人好しな両親を嫌いじゃない。むしろ大好き。

最低限しかいない我が家の使用人の噂話を盗み聞きしたところ、貴族という身分の人は大概、人を人とも思わないらしい。それを聞いて、すごく驚いた。私が前世で暮らしていた世界は、人が平等なのは当たり前だったから。身分で人を差別することが多いこの世界で、どんな人でも当然のように人として扱い、対等な目線をもって接する両親を誇らしく思う。

さらに、両親は領民のことを第一に考え、彼らの生活が豊かになるよう、入ってきたお金のほとんどを領地につぎこんでいる。

お父様は領地の視察を毎日欠かさず行い、時には畑まで耕す。

お母様も、貴族の奥様は普通、掃除洗濯なんてしないのに、毎日家事をする。

そして、二人はたくさんの愛情を私に注いでくれる。

子供としては、そんな両親のお手伝いをしたいじゃない？

この世界の文化レベルは、中世ヨーロッパのようなイメージ。生活の上で、たまに不便を感じることがある。だから、私がこうして前世の記憶を持って生まれたのも、意味があってのことだと思っている。なにかしらの役に立つと思うんだ、私の持っている知識が。

前世では親孝行できなかった私。

元・日本人としての知識、愛する両親のために活用させていただきます！

◇◆◇

今日は、フィルアという農村にお邪魔しています。なぜかって？

先日、親孝行すると意気込んだのはいいけれど、なにから手をつければいいのか分からなかったためです……

そして今さらですが、私はこれまで家から出たことがありませんでした。家のまわりで遊んだり、庭を探検したりはしましたよ。だけど、それ以上遠くへ出かけたことはなかったんです。なにせ、言葉を習得するのに必死でしたから。

そんな私は、この世界の歴史や情勢を知りません。

何をするにも、まずは現状の把握が必須じゃない？

そこで、領地の視察に行くお父様に、私も行きたいとおねだりをしてみました。

「リリアナ、遊びに行くんじゃないよ？」

お父様の弱点など、この七年でお見通しだ。くらえ、私の必殺技を――！

目を潤ませながらお父様を見上げ、首を傾げ、指を組んで顎の下に添える。このお願い攻撃のおかげで、私は未だに負け知らず。もちろん、私の不敗神話は更新されました。我ながら将来が恐ろしい。

今日の視察は、家から一番近い農村、フィルア村。

そんなに遠くないので、お父様と一緒の馬に乗せてもらい、ゆっくりやってきました。

同行者は、騎士のアレスさんです。

アレスさんは飄々とした雰囲気のお兄さんで、お父様の補佐官でもある。

さて、そのフィルア村ですが、ここは森に囲まれた長閑な農村で、民家も三十軒ほどしかありません。お父様は、その中でも一番大きな家の扉を叩きます。

「ようこそお出でくださいました、領主様にアレス殿。今日は随分と可愛いお連れ様もご一緒ですね」

人の良さそうな、朗らかな男性が扉から現れました。
「お久しぶりです、ダグラス村長。今日は、娘のリリアナが一緒に行きたいと駄々をこねまして。リリアナ、彼はこのフィルア村の村長、ダグラスさんだよ」
「はじめましてダグラス村長さん、リリアナです。今日はよろしくお願いいたします」
村長さんは、私にも笑顔で応じてくれた。
お父様と領民の関係はどうなのだろうと気になっていたけど、取り越し苦労だったみたい。
まぁ、お人好しのお父様だもんね。
「視察はお嬢様には退屈でしょう。私の娘と一緒に遊んでいただけませんか？　娘もリリアナお嬢様と同い年なのですよ。この村には、娘と同じ年頃の子がいないので喜ぶでしょう」
村長さんはそう言うと、家の奥から一人の少女を連れてきた。チョコレート色の髪に、同色のくりっとした大きな瞳が可愛らしい。だけど、人見知りをするタイプだったみたい。私を見ると、俯いて固まってしまった。
「はじめまして、リリアナと言います。あなたのお名前は？」
私が尋ねると、少女は弾かれたように顔を上げ、頬を染めて笑みを浮かべる。
なに、この可愛い小動物。ぜひともお持ち帰りしたいよ。

「私の名前は、ミーナって言います」
「ミーナちゃん、私と一緒に遊んでくれる？」
二人でご挨拶していたら、じゃあいい子にしているんだよ、と言ってお父様とアレスさん、村長さんは視察に行ってしまった。一方ミーナちゃんは、私を家の中へ引っ張っていく。
あれっ、私なんのために来たんだっけ？
「リリアナ様、なにして遊ぶ？」
「ミーナちゃん、様なんてやめて。リリアナと呼んでよ」
「でも、お父さんがリリアナ様とお呼びしなさい、って言ってたもん」
「私が良いと言っているんだから、これからはリリアナと呼んでね。私はミーナちゃんと呼ぶから」
そう言うとミーナちゃんはうれしそうに私の両手を握り、リリアナちゃんなにして遊ぶ？とニコニコしながら聞いてくる。かくれんぼはもっと大人数の方が楽しいし、トランプをやるにもこの世界にはおそらくトランプなんてないし、さてどうしよう……
結局、あやとりにしました。自分の発想力のなさにげんなりです。それでも、あやとりは初めてだと言って、ミーナちゃんは楽しそうに遊んでいる。良い子だよ。

「ミーナちゃん、この村の人達は畑を耕して生活しているの？」
「うん。猟師のおじさんもいるけど、畑で野菜を育てる人の方がいっぱいだよ、リリアナちゃん」
まだ慣れないあやとりと格闘しながら、ミーナちゃんが答えてくれる。
「森に囲まれているから、腐葉土もたくさんありそうだもんね。作物を育てるのに良さそう」
「フヨウド？　リリアナちゃん、なにそれ？」
「森に入ったとき、落ち葉の下が黒い土になっていない？　その黒い土をね、腐葉土というの」
そうなんだ、とミーナちゃんは相槌をうつ。
「落ち葉なんかが腐った土なんだよ。あとは灰も畑に良いの」
……確かそうだったはず。
「リリアナちゃんは物知りなんだね」
ミーナちゃんは、キラキラした目で私を見つめる。
そんな純粋な目で見られたら、間違ってるかもしれないだなんて言えないよ。
それから二人であやとりに熱中していたら、いつの間にか大人達が帰ってきていました。

「リリアナ、そろそろ帰るよ」
お父様が私を連れて帰ろうとしたら、ミーナちゃんの大きな瞳から大粒の涙がこぼれ始める。
「リリアナちゃん、帰っちゃいやぁ！」
なんて可愛いことを言うの、ミーナちゃん。やっぱりお持ち帰りしたいな。
「ミーナちゃん、泣かないで。お父様と一緒に、また遊びにくるから」
私がそう言ってミーナちゃんに抱きつくと、ミーナちゃんは頬を真っ赤に染めて、瞳を潤ませる。
「リリアナちゃん、また私と遊んでくれるの？」
「うん。もちろん！」
「じゃあ、私とリリアナちゃんはお友達だね！」
ミーナちゃんは、また遊びに来てね、と名残惜しそうにしながら、ダグラス村長さんと一緒に村の入口まで見送ってくれた。
今日、今世で初めての友達ができました。

◇　◆　◇

私の名前は、ミーナ・フィルアです。
お父さんはフィルア村の村長をしています。うちは代々続く村長の家系なんだって。
そんな我が家に、今日は素敵なお客様が来たの。
一人は領主様。とても優しい人で、今の領主様になって良かったって皆が言ってるの。前の領主様は、恐ろしい人だったんだって。今の領主様は私に時々お菓子をくれるの。そんな人が悪い人なわけないもんね。それから、領主様を守る騎士様も一緒に来た。ここまではいつもの顔ぶれ。だけど、お客様はもう一人いたの。
「今日はね、リリアナちゃんとお友達になったの！」
私は初めて同じ年のお友達と遊んだ興奮が冷めず、夕食の席で今日のことをお父さんとお母さんに語った。
「リリアナちゃんはね、真っ白な肌にサラサラの銀髪なの。それとね、瞳が吸いこまれそうなほど綺麗な紫水晶の色なの。私、あんまり綺麗だから感動しちゃった」
豆のスープを木の匙ですくっても私のお喋りはなかなか止まらず、スープは皿の上にポタポタと落ちていく。

はじめはお父さんとお母さんも注意してきたけど、もう諦めたみたい。今は私の話をうんうん、と言いながら聞いている。だから、リリアナちゃんの自慢話をいっぱいしているの。
「それにね、リリアナちゃんは物知りさんなんだよ。腐葉土や灰が畑にいいんだって知ってた？」
すると、お父さんとお母さんは首を傾げた。
「フヨウド？」
「お父さんもお母さんも知らないの？」
いつもはお父さんやお母さんに聞いてばかりの私。だから逆に教えてあげられることがうれしくって、リリアナちゃんの言ってたことをそのまま伝えたんだ。そしたらお父さんは、試してみる価値はあるな、とブツブツ言いながら考え始めちゃった。つまらない。まだまだリリアナちゃんの話を聞いてほしいのに。
それから数ケ月して——
昨日、お父さんが凄くウキウキして帰ってきたの。リリアナちゃんの話をした次の日、お父

さんはさっそく使っていない畑の一部に、腐葉土や灰を撒いて作物を植えてみたんだって。そしたら、作物の成長速度は早いし、他の畑のものより大きく育っていて、収穫量がすごく増えそうだって、喜んで話してくれた。これからは他の畑でも試してみて、良い結果が出たら村の畑のすべてに使おうって。

そして今日、リリアナちゃんが村に遊びにきてくれたから、その話をしたの。リリアナちゃんはなぜかほっとしてた。なんでだろう？

◇ ◆ ◇

後に、腐葉土と灰はミーナの住むフィルア村の畑すべてに使用され、その年の収穫量は過去最大となった。

領主はオリヴィリア領すべての村にその方法を広め、オリヴィリア領はいつしか国の食糧庫と呼ばれるようになった。

領主の娘であるオリヴィリア伯爵令嬢も、いつしか『豊穣の娘』として広く知られるようになる。

そして、数多の伝説を残すリリアナ・ラ・オリヴィリアには、生涯の友がいた。

その生涯の友こそ、ミーナ・フィルアという。

第二章　天使と食堂の女主

もう少しで、私は八歳になります。

数日後に内輪の誕生日パーティーをすることになり、友達のミーナちゃんも来てくれるそうです。

ただ、心配なことがあります。最近、お母様の体調が良くないんです……

いつも眠そうだし、身体もだるいみたい。

治療師、つまりこちらの世界での医者に診てもらったら、しばらくこの状態が続くので、無理をせず安静に、と言われたそうです。だから誕生日パーティーも今年はしなくていいかな、と思っていたんだけど、リリアナちゃんがまた一つ大人になったおめでたい日なんだから絶対にやるのよ、とお母様に凄い剣幕で言われてしまいました。

我が家は貴族ですが、貧乏なのでお母様も家事をします。数少ない使用人をまとめあげ、指示をする。手があけば、手間どっている人を手伝ったりして、なにかと働くお母様。

そのお母様が動けない今、私が働かずして誰が働く！

私は、家事のお手伝いをすることにしました。もともとちょっとしたお手伝いはしてきたのだけれど、子供は危ないからダメ、とそれ以上させてもらえなかったんだよね。でも前世ではお母さんがバリバリに働いていたから、必然的に私が家のことをやっていたんです。だから家事には自信がありますよ。

そして、私にはなんとしてもチャレンジしたいことがありました。それは料理。

この世界の献立は、パンに、豆や野菜のスープのセットが基本。これに、ソースを添えた焼き肉、チーズやソーセージ、オムレツなどがプラスされる。

だけどね、日本で当たり前のようにたくさんの料理を食していた私としては、もうちょっとバリエーションが欲しい。うれしいことに、こちらの食材は地球と同じ形状と味で、町のお店に行けば簡単に手に入る。時期や産地の問題があるから、スーパーマーケットのように旬じゃない食材は手に入らないんだけど。そこまで高望みしてはダメですよね。でも残念。

こちらの世界にも、焼く、煮る、茹でる、炒める、和える、漬けるといった調理法はあるんだよ。

だけど、調理法ってまだまだあるよね。いぶすとか、干すとか。今回は、蒸すに挑戦した

いと思います。
前から料理にチャレンジしたかったけれど、子供の私は調理場に立ち入り禁止だった。なので、料理長さんにレシピを渡して、これを作ってほしいの、とお願いしたことがある。
そしたら、問題発生。作り方はまだしも、計量カップやらの調理器具がないから、食材の分量が伝わらなくて作れない。
料理のレシピによく書かれている『少々』ってどれくらいだと思う？
正解は、親指とひとさし指の二本の指先で自然につまんだくらいの量なのだけど、これと同じような疑問がすべての食材につきまとうのだから、難しいよね。食材を無駄にしてしまうのももったいないので、結局作ってもらうのを諦めたんだ。料理長さんも申し訳なさそうで、罪悪感でいっぱいになってしまったのは苦い思い出。
だけど、ようやくリベンジの時が巡ってきたようですね。
人間の三大欲求の一つをなめてもらっては困ります。もちろん、満たしてみせましょう。
分量についてはひとまずおいといて、お父様に必殺技を放ち、作ってほしいものがあるの、とおねだりをしました。勝敗は予想通りだよね。ごめん、お父様。でも、これも豊かな食生活のためなのよ。

本日、そうして出来上がった調理器具を、ようやくお披露目できます。子供の私がすべての調理器具を運ぶのは大変なので、すでに調理場に運んでもらっています。
ウキウキしながら調理場に行くと、料理長さんは心配そうに尋ねてきた。
「お嬢様、ここは火や包丁を使う場所なので危険です。私に任せてはいただけませんか？」
「料理長さん、私は危ないことをするつもりはありません。今、お母様は体調が悪く臥せっています。だけど、幸いにも食欲はいつも通りです。美味しい料理を食べて、早く元気になってほしくて……そのお手伝いがしたいの。ダメ？」
しゅんとした様子で、料理長さんを涙目で見上げる。
「それに、一人でも多くの手があった方がお仕事も早いでしょう？　ねっ、お願い！」
「うっ……ご自分で火や包丁を使ったりしないとお約束していただけるのであれば、承知いたします」
「分かりました。ありがとうございます！」
私はお礼を言って、調理台の前の手頃な踏み台の上に乗る。すると、料理長さんが私の恰好をまじまじと見つめてきた。
「その布はなんですか？」

私は服の上に重ねた、あるものをつまむ。

「エプロンです。衣服が汚れないように着るものですよ」

なにせ、我が家は貧乏一家。服なんて数着しかないんですからね。だから作っちゃいましたよ。

「へえ、それは便利そうですね」

そう言って、料理長さんはまじまじと見てくる。そんなに気に入ったのならば、感謝のしるしに今度料理長さんにも作ってあげよう。そんなことを思いながら、調理台の上に広げられた調理器具とレシピを確認する。

思い返せば、レシピ作りはとても大変でした。この世界にも秤はあるのですが、前世とは異なる単位のおもりを使ってはかります。各料理に必要な材料を、そのおもりで一つずつはかってレシピに書きこんでいったんだけど……気の遠くなる作業だったよ。

「今日のお昼の献立は、中華まんにシュウマイ。あとは野菜炒めです。この調理器具とレシピさえあれば、誰にでも美味しい料理を作ることができます。この紙に書かれた調理法を読んで、きちんと中華まんとシュウマイの生地は作れましたか？」

私が用意したレシピでちゃんと料理ができるか知りたかったので、料理長さんにはあらかじめ生地の作成をお願いしてたんです。子供の力だと時間もかかるし、中華まんの生地は発酵のために寝かせる必要があったからね。

前もって献立を伝えたとき、野菜炒めについては作ったことがあるということで料理長さんもすぐに了承してくれた。だけど、中華まんにシュウマイという初めて耳にする料理には、凄く不安そうだった。そこを、絶対に美味しいのよ、お願い、と説得してなんとか生地作りに挑んでもらいました。感謝しています、料理長さん。

「これが頼まれていた生地です」

差し出された二つの器には、中華まんとシュウマイの生地がそれぞれ塊で入っていた。うん、分量もバッチリ。レシピを見ただけで、きちんと生地が作れている。良かった。

本来、中華まんの生地には砂糖を入れるのだけれど、今回は砂糖不使用で作ってもらいました。砂糖がなくても、きちんと生地は作れるんです。なぜ砂糖不使用なのか、つっこんではいけません。我が家は貧乏なのです。貧乏って、悲しいね……

ダメ、忘れるの、リリアナ。さぁ、気合いをいれて作らなくては！

「ありがとうございます。私はシュウマイを作るので、料理長さんは中華まんをお願いします」

「かしこまりました」

私は目の前の生地を同じくらいの大きさにちぎって並べ、乾燥を防ぐため、濡れ布巾をかけた。このちぎった生地を布巾の下から一つ手に取り、たっぷりと打ち粉を振って、麺棒で円形にうすく伸ばす。これで、シュウマイの皮が一枚完成。できた皮にも、乾燥しないように濡れ布巾をかける。こうして地道に作業を繰り返し、皮を増やしていく。

料理長さんはレシピを見ながら、中華まんとシュウマイの具も作っている。具の食材を切るのに包丁を使うからって、仕事を一つとられたんです。約束だから仕方がないけれど。

ふう、皮完成。たったこれだけでも、私の年齢だと結構大変だね。

私は顔に粉がつかないように、右腕で額の汗を拭う。

「お嬢様、シュウマイの具ができました」

タイミング良く、料理長さんがシュウマイの具が入った器を持ってきてくれる。

「ありがとうございます」

私に器を渡すと、料理長さんはすぐに自分の仕事に戻り、てきぱきと仕事をこなしていく。さすがは我が家の少数精鋭部隊の一人。仕事ができますね。さて、具を包みますか。

私は左手の親指とひとさし指で輪を作り、シュウマイの皮をのせて真ん中をへこませ、巾着のようにした。そのへこみに具をたっぷりと入れて、表面を平らに整える。

具を包んでいく作業は最初は楽しいけれど、量があると飽きてきて辛いよね。いやいや、そんなことを考えちゃいけない。考えれば考えるほど、辛くなるに違いないから。

私は雑念を捨てて、作業に集中した。そうして、ようやく目の前にたくさんのシュウマイ群が完成した。

うん、頑張った。私は誇らしげに胸を張る。

料理長さんのほうを見ると、蒸籠で大量の中華まんを蒸す作業に入っていた。

蒸籠もお父様にお願いして、きちんと作ってもらいましたよ。
私は別の蒸籠を持ってきて、皮がくっつかないよう下に軽く油を塗ってからシュウマイをすべて並べる。
「料理長さん、シュウマイも蒸してもらえますか」
蒸すのも火を使うからね。残念ながら、私ができるのはここまで。野菜炒めにいたっては、野菜を洗うくらいしか許されていないもんね。
「お嬢様、あとは私がやります。こちらは順に蒸していくだけですし、その合間に野菜炒めもできます。どうぞ、お部屋でお待ちください」
「片付けくらいやりますよ。それにお願いした立場としては、最後まで見届けたいですし」
結局、危ないからという理由で片付けもさせてもらえず、その後は調理場で料理長さんに初めての調理器具の感想を聞きながら過ごした。
料理長さんにとって蒸すという調理法が斬新だったらしく、食べるのが楽しみだと言ってくれた。
「よし、そろそろ蒸し上がります。料理をお母様の部屋に運んでください」
我が家は、食事は家族全員で、がルール。最近は、臥せっているお母様の部屋に料理を運び、

家族三人で食事をしている。昼食は、お父様が視察で不在のときもあるけれど、今日は一緒にいただけると朝に確認済みです。
「かしこまりました。奥方様も、お嬢様の料理ですぐお元気になるに違いありません」
「ありがとう。今日の料理の感想、あとで聞かせてくださいね」
この料理を食べるのは、私達家族だけではない。使用人と、賦役として領主の畑を耕している領民にも配られる。だから、献立を考えるとき、配りやすい中華まんにしたんだよね。量はてんこ盛り。皆の感想が楽しみだな。
調理場を出て、そのままお母様の部屋にウキウキしながら向かうと、部屋にはすでにお父様がいて、イチャついていた。いつものことなので、躊躇いなく私も二人に抱きつきます。
しばらくすると、料理が運ばれてきた。蒸籠の蓋を外すと湯気が立ち上がり、美味しそうな匂いがただよう。
初めて見る料理に、お父様とお母様も興味津々。あとはお茶があれば飲茶っぽいのに。こちらの世界には、お茶や紅茶がないんだよね。飲み物も、いつかバリエーションを増やしたいな。
「お父様、お母様、今日の料理は私が考えました。大きいほうが中華まんで、ちっちゃいほ

うがシュウマイです。湯気を利用した、蒸すという調理法に挑戦してみました。あとは野菜炒めです。感想、聞かせてくださいね」
「リリアナちゃんの考えた料理ですって、それは楽しみだわ」
「お母様のかわりにリリアナは頑張ったんだね。お疲れ様。では、森の実りに感謝していただこう」
「ありがとうね、リリアナちゃん。森の実りに感謝いたします」
「喜んでもらえて良かったです。森の実りに感謝いたします」
こちらでの「いただきます」を言って、二人はまず中華まんを一口サイズに手でちぎって食べる。
多分、パンの仲間だと思っているんだろうな。
じっと見ていると、お父様とお母様の動きが一瞬止まる。だけどすぐに、二人はもくもくとまた食べ始めた。
もしかして不味いのかな。私は、おそるおそる中華まんを口に入れる。
うん、中華まんだよ。具だくさんで食べごたえがあるし、なにより中に入れたチーズがとけて、食材とのハーモニーも絶妙。

なのになぜ、この二人は無言なの。前世での料理は、こっちの人達の口に合わないの？
「お父様、お母様。お口に合いませんでしたか？　ごめんなさい……」
そこでようやく二人は顔を上げ、私を見てくれた。その表情はやけにイキイキしている。
「リリアナは天才だね。この料理、凄く美味しいよ！　具を包んでいる生地もふっくら、しっとりだね」
「リリアナちゃん、これは料理の革命よ！　新たなる食の歴史が刻まれたわ」
「お口に合ったようで良かったです。シュウマイもぜひ召し上がってください」
お父様とお母様に、今度はシュウマイをすすめる。二人はシュウマイを不思議そうに眺めたあと、フォークで刺して口に入れた。
「とってもジューシーで美味しいわね」
「食べた途端、口の中に肉汁が広がるね。旨味が凝縮されている」
うふふ、そうでしょう。蒸すと形が崩れにくいし、風味をそこなわないから、素材の味を活かすことができる。さらに、栄養をあまり失わないので、身体にも良い。
二人は笑顔で料理を食べている。あっ、野菜炒めも、美味しいと言ってもらえましたよ。食卓に笑顔があるのは、凄く幸せなこと。その笑顔が私にとっては、幸せの味。料理の最後

の隠し味です。
あっという間に平らげられた料理のお皿をうれしく思いながら眺めていると、新たなる野望がムクムクと顔を出した。
「お父様、お母様、これからは私も料理をしてよいですか？」
他にも試してみたい料理は山ほどあるんです。
特に麺類。パスタを作りたいんだよね。残念ながらこの世界には、麺もないの。
多分、原因はフォーク。フォークはあるのだけど、歯が二本しかないの。これじゃあ、麺が食べられないよね。だって、絡められないもん。箸にいたっては、存在すらしていない。
もしかしたら過去に麺料理を作った人はいたのかもしれないけど、根付かなかったんじゃないかと思う。
四本歯のフォークも、お父様にお願いして作ってもらっているところ。改フォークが出来上がったあかつきには、パスタを作ってやる。そして、フォークにこれでもかってくらいに麺を巻きつけてみせるんだから。
その日、私は無事、料理権を勝ち取りました。

そして、数日後の誕生日パーティーでお母様が爆弾を投下しました。
「リリアナちゃんへの贈り物は、これです」
お母様は自分のお腹に両手を当てて、慈愛に満ちた笑顔で言いました。
「リリアナちゃんに、弟か妹ができます」
「えええーーーーーーー！」
なんでお父様まで驚いてるんですか、お母様。
「リリアナちゃん、うれしくないの？」
いやいや、うれしいけど、まさかの報告に私はビックリですよ、お母様。
「アリス、今の話は本当かい？」
「あら、ルイス。貴方も喜んではくれないの？」
そう言って、しゅんとした様子でいじけ始めるお母様。ちなみに、ルイスとアリスは両親の名前です。
「そんなこと、あるわけないだろう。リリアナという可愛い娘だけじゃなく、もう一人私の子を産んでくれるだなんて、君には感謝してもしきれないよ」
お父様はお母様を優しく抱きしめ、頬にキスを落とす。

はい。相変わらずのバカップルですね。でも、寂しいから私も混ぜて！　と乱入する。
弟か妹が生まれることになりました。
最近、具合が悪そうだなと思っていたけど、妊娠初期の症状だったんだって。それで、お母様はいつも眠くてだるかったみたい。治療師の方に、私達を驚かせたいから内緒にしててちょうだい、と頼んでいたらしい。
「リリアナちゃん、お誕生日おめでとう。弟か妹ができるんだね。奥方様も、病気じゃなくって良かったね」
誕生日パーティーに来てくれたミーナちゃんは、私の手を握りながら一緒に喜んでくれる。
「あれ、リリアナちゃん。手に傷があるよ」
「ああ、料理したときに包丁でちょっと切っちゃったの」
実は料理長さんの目を盗んで包丁を使っていたんです。もちろんバレないようにすぐ隠しましたよ。まあ、小さな切り傷だし、すぐ治るよね。でも、前世で主婦を自認していたのに、怪我をするなんて……
ミーナちゃんを見ると、まるで自分が傷ついたように、悲しい顔をしていた。
「リリアナちゃん、私が治してあげるね。我願う、リリアナちゃんの傷を治したまえ」

傷ついた手の上にミーナちゃんの手がかざされると、ほのかな温もりを感じた。
しばらくして、手がどかされ……
私の手の傷は、すっかり消えていました。
「ええぇーーーーーー！」
ミーナちゃん、私になにをしたーーーーーー!?

◇◆◇

私の名前は、マリア・シェリスタ。
はっきり言おう、偽名です。本当の名前は、マリア・リーシェリ。
今では大きな組織に発展したリーシェリ商会の末娘として生を受け、数奇な運命により、王都ローレリアにて

食堂を営み生計を立てている。
リーシェリ商会を束ねる父さんには家を出るとき勘当され、そのまま私は行方をくらませた。
あれからもう三十二年。今では、立派な食堂のおばちゃんだ。
生家とは、家を出てから連絡をとっていなかったが、数年前に私の居所を掴んだ兄さんは、時々私のもとを訪れる。
「お久しぶりね、兄さん。元気そうでなによりだわ」
この日やってきた兄さんは、手に持っていた大きな箱を私の前の机に置いた。
「マリアも元気そうで良かった。これは、頼まれ物だ」
「兄さん、いつもすまないわね。様子はどうだったかしら？」
「担当の話によると、幸せにやっているらしい。誰に似たのか、お人好しすぎてどうなることやらと心配していたが」
「うふふ、それは良かったわ。それにしても随分と大きい箱ね。なにが入っているのかしら」
私は、ゆっくり目の前の箱を開く。
そこには見たこともない道具と紙の束がひとつ、そして一通の手紙が入っていた。
「兄さん、なにかしらこれ？」

「なにかの道具みたいだが、やけにたくさんあるな。マリア、手紙を読んでみたらどうだ」
私は箱から手紙を抜きとり、開封する。
便箋には、手離さなければならなかった息子の、懐かしい字が並んでいた。

母さん、久しぶりだね。
商会から母さんの手紙を預かったよ。相変わらず元気そうでなによりだ。
だからといって、無理して身体を壊したりしないでくれよ。
最近、妻が体調を崩して臥せっていたんだ。
可愛い天使は心配して、お母様のためにと家事の手伝いをしていたよ。
特に料理への入れこみようは凄かった。見たこともない道具を作ってほしいと言うので作らせてみたら、それは調理器具だと言うんだ。
さっそくその調理器具を使って、料理長と一緒に天使は料理を作ったよ。
正直、不味くても全部食べなければと覚悟していた。
それがどうだろう。今まで母さんの作った料理が一番だと思っていたが、天使の料理は素晴らしく美味しくて、褒めるのも忘れて夢中で食べてしまったよ。料理上手は母さんに似た

んだろうね。
私達夫婦はもちろん、この料理を食べた賦役の領民や使用人も感激して、神々の料理だと絶賛していたよ。この絶品料理を目当てに、賦役の領民達は今まで以上に耕作に励み、賦役の日を楽しみにする者まで出てくる始末。
使用人は暇さえあれば調理場に通い、料理を教わっている。
自分達の家族にも美味しい料理を食べさせたいと、必死になってね。
そんな状況を知った天使は、使用人にレシピと調理器具をあげたんだ。
いつも仕事を頑張ってくれている御礼として。
レシピというのは調理法を記した紙で、それを見ながら天使の調理器具を使って料理をすると、誰にでも美味しい料理ができるらしい。
母さんにもその料理を味わってほしくて、箱の中にレシピと調理器具を入れておいたよ。
他にもエプロンという衣服の汚れを防ぐ前掛けや、四本の歯がついたフォークが欲しいと言うから、作らせてみた。使用して、ぜひ感想を聞かせてほしい。
それから、妻の体調が悪いと書いただろう。天使の誕生日に、妻は最高の贈り物をあげたんだ。

なんと、天使に弟か妹ができるって言うんだ。来年には私達の天使がもう一人増えて、天使達になる。母さんにも、いつか天使達を見せたいよ。
読み終えると、兄さんがハンカチを用意してくれていた。
息子からの手紙を読むときには、いつも涙が出てしまう。
「マリアは本当に涙もろいな」
「あら、これはうれし泣きだからとても幸せなことなのよ。素晴らしいことに、来年にはもう一人天使が増えるらしいわ」
「もう一人生まれるのか。それはめでたいな。マリア、もう会ってもいいんじゃないのか？あのときとは状況が違う」
私はハンカチで目元を拭いながら、首を横に振る。
「ダメ。私はあの子を最後まで守れなかったんだから、会う資格なんかないの。そもそも、私のような平民と血の繋がりがあると分かってはいけない。本来は、手紙のやり取りすらするべきではないのに」
だけど、つい息子と兄さんの好意に甘えてしまっている。少しでも繋がりを持とうとする自

分が浅ましい。
「ところでこの道具はなんだったんだ、マリア？」
兄さんは私の梃子でも動かない決意を察し、重い雰囲気を払拭するように言った。
まぁ、もともと気になっていたのでしょう。商人の悲しい性ね。
「この道具は調理器具で、紙の束はレシピという調理法を記したものらしいわ。この調理器具やレシピは、天使が考えたんですって。この通りに作ったら、天使が作った味を再現できるらしいわ」
「この道具は調理器具だったのか。でも、子供の考えたものだろう」
「兄さん、馬鹿にしてるの？　向こうの使用人や領民達は、天使の料理を神々の料理と呼んでいるらしいわよ」
「それは聞き捨てならないな。マリア、そのレシピとやらから、なにか作ってくれよ」
「もう、仕方がないわね」
天使が作ったレシピの束の中から、『野菜天ぷら』と書かれたものを抜きとる。
野菜はお好みで良いようだし、これだったら今ここにある食材で事足りるわね。
私はさっそくエプロンを着け、調理に取りかかった。美味しくするコツは、小麦に水だけ

でなく、卵も入れて衣を作ること。食材、衣に使う水や卵は、冷えていた方がさっくり美味しく仕上がると書かれていた。私は天使の料理の味を再現するために、レシピに忠実に調理をしていく。
すべての食材を揚げ終え、料理を盛りつけて兄さんの前に皿を置く。
皿の隣には、天使が考案したという四本歯のフォークを置いた。
「これが兄さんの分ね。森の実りに感謝いたします」
「黄色くてふわふわした見た目だが、意外とパリッとした料理なんだな。森の実りに感謝いたします」
兄さんはお行儀悪く、天ぷらをフォークでツンツンとつつき、それからゆっくりと口に運んだ。私も早く天使の料理を味わわなければと、天ぷらを口に入れる。
口にした瞬間、二人して動きをとめ、思わず叫んでしまった。
「「美味しい！」」
「おい、マリア。これは確かに神々の食卓の料理だ。こんなに旨い物は初めて食べた！」
「これは、神々の慈悲だわ。まさに、天使が私達のもとへ授けてくださった料理ね！」
初めて食べるサクサクとした食感とその美味しさに二人して感動した。

「レシピ通りに作れば、こんなに美味しい料理ができるのか」
「手紙通りだとしたら、そういうことになるわね」
「これは、王国中に広めるべき料理だ。このレシピと調理器具さえあれば、この味を楽しめるなんて素晴らしすぎる。それにこのフォーク！　歯が四本あると、食材を刺したときに安定感がある」
「こんな単純なこと、どうして今まで思いつかなかったのかしら。この方が実用性があるわね」
私は右手に持ったフォークを感嘆の思いで、まじまじと見つめる。
「マリア、このレシピと調理器具、フォークをぜひ商会で販売したい」
兄さんの商魂が刺激されたらしい。こんな絶品料理が誰にでも作れるのだから、売りに出せば絶対に大繁盛だ。
可愛い天使には、素晴らしい才能があるのだろう。息子達が天使を優しく見守り、幸せに暮らしていることは、手紙からもよく伝わってくる。
しかし、私は噂で知っている。
彼の領地経営が火の車であること、苦しみや悩みの種も少なくはないこと。

息子には事後承諾になるが、兄さんに販売の許可を出した。もちろん、利益の半分は彼の領地に納めることを約束させた。私だって、人の親だしね。
それからの兄さんの行動は早かった。調理器具とレシピを私から借りると、それを見本にしてすぐ生産にかかった。さすがは、王国中にリーシェリ商会の名を鳴り響かせた立役者の一人。
やがてレシピは『贈り物』という題名の書物となり、調理器具と一緒に販売された。すでに商会の傘下の食堂では天使の料理が提供されて話題となっていたため、レシピと調理器具は即日完売。大量生産するも追いつかず、評判は高まるばかりだ。
予想外だったのは、エプロン。服が汚れるのを防ぐ作業衣だったのに、どういうわけか、若い娘達の流行服として一世を風靡することになった。

◇　◆　◇

後に、王国のあらゆる家庭に天使の料理は浸透し、ついには王宮でも供されるようになった。各国の賓客はその料理に舌鼓をうち、評判は国外へも広まっていった。